

ナイアガラタイムス

発行日 2020年5月20日



目次

名盤探検隊 かぐや姫「かぐや姫・今日」

美味な話 ①とんかつ屋たちばなのカツ丼の巻

シネマ滝 「男はつらいよ 50」

～THE極み～ 悠朋会 日高さん「介護という仕事ほど面白いものはない」

忘れられない一日

『名盤探険隊』

滝は、音楽大好き人間、CDコレクターである。そんな私が、毎回一枚好きなアルバム、聞いてみてもらいたいアルバムを紹介していきたいと思う。

ただ、滝は50代、どうしても古いアルバムを紹介してしまうかもしれない。それでも誰にでも入手しやすい物を紹介していこうと思う。

それにしても今回は、古過ぎるゴメンナサイ

かぐや姫「かぐや姫・今日」(1978年4月発売)

私が中1の頃、先輩のお姉さんが何枚かLPを貸してくれた中の1枚だったと思う。それが、今でも大好きなアルバムである。

かぐや姫が一回目の再結成した時に制作された最後のスタジオアルバムだ。

このアルバム、四畳半フォークのイメージは全くない、「神田川」などのヒットシングルも一切収録されていない、それまでのかぐや姫とは違う。きっと彼らは、何年後にも愛されるポップなアルバムをつくらうとしたのかもしれない。

アルバムのオープニングを飾る「遥かなる思い」のサクスの音色がなんと心地いいこと。そこから続く、南こうせつ、伊勢正三、山田パンダの三人が持ち寄った楽曲達のクオリティーの高いこと。アルバムの中盤に「センセーショナルバンド」という曲があるのだが、これは三人が楽しくハモっているのが分かる。

42年前という昔のアルバムだが、今朝アマゾンで探してみたら、流通はしている。入手はしやすい。

「おまえが大きくなった時」という曲で、このアルバムは締めくくられるのだが、この曲、環境問題を歌ったものだと思われる。だが、今のこの先が見えない時期に聞くと凍みる1曲である。



【美味な話 ①とんかつ屋たちばなのカツ丼の巻】

皆さんは、朝7時から営業している「とんかつ屋」って想像できますか。今から15年前まで、新横浜の駅ビルにあったんです。朝はバイキングだったんだけど。俺はその店のかつ丼が大好きである。

出会いはハタチ。新横浜で障害者団体の集会在2泊3日であった。俺は、その2日目の夕方、内容に飽きたのか、なにか用事が出来たのか、とにかく帰ることにした。その時近くにいた人が「僕も今日帰ります」と言ってくれて一緒に新横浜駅まで帰った。そこで食べたカツオ出汁が効いていて、とにかく柔らかいとんかつ。「たちばな」のカツ丼。今でも大好きである。

それ以来、新横浜に行くたびに、その店で、かつ丼を食べる事が楽しみになっていた。どうしても時間がない時は店先に売っていた、かつ丼弁当を買っていた。

ふむ、「今から15年前まではあった」「今でも大好き」なんか、この流れしっくりこない。実は新横浜駅の駅舎がリニューアルされた時、「とんかつ屋たちばな」はなくなった。けれど、カツ丼ファンが多かったのだろう、今から9年前、俺が新横浜にバイトに通っていた頃は、出店的に週一ぐらいのペースでコンコースで売っていた。だから「運が良ければ買える」のだった。それが5年前ぐらいだろうか。ブースが設置され、毎日買えるようになった。とんかつ屋が閉店されてから10年以上経ってからの事だった。

ブースが設置されてから俺は、新横浜に用事があるたびに買って帰るようにしている、



『シネマ滝』

これから一本ずつ、滝の好きな映画のことを書いていきたいと思う。邦画に偏ってしまうかもしれないが、お付き合い願いたい。

『男はつらいよ50～おかえり寅さん～』（2019年12月公開）

映画館で映画を見て、終わった瞬間に「見に来て良かった」と思える作品はそうはない。でも、これは、そんな映画だった。

22年振りの寅さんシリーズ。私は今まで見たことなかったが、「男はつらいよ」がどんな映画だったのかが大体分かった。同時に、なんで今まで見てこなかったんだろうと後悔した。

柴又の家は、そのまま。さくらも本当に品がいい素敵なおばあちゃんになっていた。その中で寅さんが、時折登場する。つまり現在と過去が行ったり来たりするのだ。

さくらの息子、満男は50才。サラリーマンを辞め小説家になっており、娘と二人暮らしをしている。そんな日々の中で、ある日バツタリ高校時代の初恋の人に会い、それが軸になり、本作品は展開していく。

寅さんの思い出、寅さんなら、こんな時どんな言葉をかけてくれるのか。そんな事を思い巡らせながら、今を一生懸命に生きている車一家を描いている。



『～THE極み～』

この社会は、様々な仕事で成り立っている。一人一人、毎日その道を極めようとしながら。この『THE～極み～』では、それぞれの道で、仕事と向き合い、極めようとしている人に話を聞き、生きる活力を探していきたい。

滝：第1回目『THE～極み～』のお客様、社会福祉法人「悠朋会」のケアマネージャー日高さんです。よろしくお願いします。

日高：よろしくお願いします。

『何故、福祉の世界に飛び込んだのか』

日高：私は単純に、おばあちゃんが亡くなる時になんにも出来なかったからというのが大きかったと思う。今からじゃ、あまり想像出来ないかもしれないけれど、やさぐれていた時期があって、仕事も勉強もしないでプラプラしていて、親に迷惑かけていた頃が何年かあったから、そこで自分になにが合ってるかなって考えたら、それが福祉だった。

滝：それは何年前？

日高：20年前か、だからハタチ。だから高校を出て大学にも進まず2年間プー太郎していたんだけど、2年経って「これじゃ、いかん」と思って、入ったのが福祉の専門学校。いくつか選択肢はあったんだけど、小さい頃じいちゃんばあちゃんから好かれる性格だったのと、小学校中学校になると、年下からすごい好かれる事もあった。だから介護でいくか保育でいくかと色々考えたんだけど、さっき言った、母方のばあちゃんが亡くなった時、「アー君に数学教えて欲しいな」と言われても、そんな事も全くしないで、自分は野球ばかりしていて、中学2年の時、部活で野球をやっていたら「おまえのばあちゃんが危篤だから、病院に行け」という事があった。それをハタチの時に思い出したというのが、保育じゃなくて、介護を選んだ理由かな。

『ケアマネという仕事の魅力、醍醐味とは』

日高：ケアマネというくりでもいいんだけど、介護という仕事ほど面白いものはないかなと思う。じいちゃんばあちゃんの介護を通して色々教えてもらえる事も多いし、自分が人間として成長していく時に人との関わりが大切だと思う。高齢の目上の方であったり、それを支えるチームの仲間達とひとつの目標に向かっていく。他の仕事もそうだろうけれど、福祉独特の人間臭さというのがあるのかな。

その中で20年、仕事をしているんだけど、デイサービスの相談員とか、特

養のワーカーを10年ちょっとやって、今ケアマネになって8年。ケアマネになってガラッと変わったのは、自分が利用者のお宅に入っていく。家の中とか、家族の関係とか、今後の事を考えて、その人の人生をもっと深いところで関わっていかれるというところ。デイサービスというのは、迎えに行きに来てもらって、デイサービスの中の生活しか分からない。ケアマネは、デイに行っている時もそうだし、夜中であつたり、家族が入院した時の家の中の様子とか、そういったところをマルッと見るような感じ。そこでもうちょっと深くお付き合い出来る事かな。そこが魅力というか醍醐味。

だから、デイにいる時より自分がしっかりしなければ、勉強をしなければと思うようになった。介護保険以外の制度を知らないケアマネさんなんていっぱいいるけれど、私は介護保険だけじゃなくて、いろんな制度、使えるサービスを勉強して、その人に合った適切な制度を提案出来るようになりたいなあと思っている。他のケアマネさんから、途中で「日高くんはケアマネ交代して」という事もあるけど、「代わったら、よく話を聞いてくれるようになった」とか「こんな事も提案してくれるんだ」とか「代わって良くなった」とか言われると、前任者には申し訳ないけれど、「代わってよし」と思う。

『仕事の苦勞、葛藤は？』

日高：今、8年経って、ケアマネとして知っておいた方がいい事は、あらかじめ勉強してきたかなと思う。最初の1年目ぐらいは苦勞したよね。デイサービスとかで経験が長いと言っても、ケアマネになったら、「こういう時はこうなさい」というマニュアルがある訳じゃないから、ケアマネになってから初めて分かる事がすごく多かった。だから仲間とか先輩に逐一聞いて勉強していたという現実はあったけれど、今は、正直言って苦勞する事はないね。さっき言った「この方だと、ちょっと大変だから、ベテランの日高君に代わって」と言われても、私に代わって苦勞する事はまずない。逆に楽しいね、そういうの。

人が最期を迎える場面にケアマネとして立ち合えるのは、そりゃあもう、ありがたい事だね。家とか病院で亡くなるころまで、最期までお付き合いした方も何人かいたけれど、みんな感謝してくれる。「いろんな事教えてくれてありがとう」「支えてくれてありがとう」「話を聞いてくれてありがとう」「主人はきれいな顔で最期を迎える事が出来ました」と・・・。

それは最初の1年目に、担当している一人暮らしのおばあちゃんを家で看取った事があるのよ。その方の時は、自分がなにも知らな過ぎたから、ドキドキしながら毎回毎回、先輩に聞きながらやっていたけれど。今は、どうやったら家族の方が気持ちになるかとか、どういう制度を使ったら最期までいけるかとか、先生とどういう連携取ればうまくいくかとか、大体見えてきたから、苦勞するこ

とはなくなった。そういう事では光栄だよな。

『日高さんの趣味は？』

滝：それでは、ちょっと目先を変えて、日高さんの趣味は？。

日高：私の趣味？、そうだね、お酒を飲む事という事が一番だけだね。

お酒も大体ビール限定。

滝：オレもそうです。オレもビール限定です。

日高：いいよね、いいよね。お刺身とか肉を食いながら、飲むビールは最高。野球をみて大騒ぎしながら飲むビールも最高。そうだね、野球とビールかな。

中学までやっていたけど。少年野球で津久井の中野でエースでやっていたけれど、ハワイにも遠征してね。中学に入って2回ぐらい肩壊して速い球投げられなくなったけれど。大人になってから、同窓会みたいに草野球チームつくったんだけど、30手前までバリバリやっていたもんね。うち、家族、子供4人で家族6人（奥さんは一人しかいないけど）、6人中、野球が好きな人間がない訳さ。だから野球でWBCとかあるでしょ。そういう時は、私だけ1階で大騒ぎして、みんなは2階に避難する。「オー」とか言ってうるさいから。私の立派な趣味だから子供達は尊重してくれている。

野球とビールかね。ちなみにアサヒスーパードライが大好き。

滝：野球はどこファンとかあるんですか。

日高：特に、どこファンというのはあんまりないんだよね。その時その時に、強いチームを応援するという悪いクセがあつてね、広島がノッている時は一方的に広島を応援するし。昔、チャンネル権がおやじにしかなかったから、夜になると野球じゃない、巨人の試合しか流れない訳さ。だからなんとなく巨人が負けていると、イラッとする事はあるけれどファンではない。

人が好き、昔の西武の秋山とか、巨人にいた清水とか、そういうプロフェッショナル系の選手が好きだね。チームよりは人を応援している感じだね。チームを応援した事は一度もない。強いチームを応援している。

『日高会について』

日高：日高会は、今8年ぐらいやっているんだけど、最初は、私が定期的に飲み会したいなと思って始めた。気の合う仲間というか、私も20年仕事をしていて、いろんな仲間がいるから、そんな中でも悩んでいてもなんとかしたいと気持ちを持っている人間を集めた。内容はエロ話がほとんどなんだけど、たまに熱い話になる訳さ。「日高君、こういう時はどうしたらいいんだろう、悩んでいるんだわ」という時は本気で相談にのって、解決まではいかないけれどヒントはあげられる。それは今でも変わらない。「なにか自分で持ち帰りたい」とか「5年後10年後に、こういうケアマネになりたい」とか「福祉の仲間と付き合っ色々勉強したい」

という色々な人達が集まっている。

さっきも話したけれど、私ケアマネになって1年目ですごく苦労した経験があって、いくら意欲があっても、なにかから手をつけたらいいか分からない最初の数か月がある訳さ（他の仕事もそうだと思うけれど）。そういう人達に事前に知識とか、どこに相談すればいいとか、どういう制度があるとかは伝えていきたい。

だから去年から、ケアマネの資格は持っているんだけど、まだケアマネとして働いた事がないとか、まだケアマネの資格も持ってないけれどケアマネの仕事を色々知りたいという人達が多かったから、ひと月に一度、飲み会をしながら勉強会をやっている。ケアマネとして知っておいた方がいい事とか、ケアマネとしてどういう制度を使ったらこういう結果になるよとか、そんな勉強会をしている。

だからエロ話中心ではあるけれど、ちょっと学びの要素も入ってきたかな。仲間には先生（ドクター）、理学療法士、作業療法士、役所の人とかがいるから「こういう時には、なにか手はないのか」という時に、いろんなアドバイスをくれる訳さ。それがひとつのネットワークになっている。顔が見える関係を最初つくろうと思った。

いろんな福祉の職種がいるじゃない、お互いに顔を知っていて気心が知れていないと気軽な事を聞けない訳よ。特にドクター対してとか医療職対してとか。顔が知っていると、「先生、こういう時はどうしたらいいの」と気軽に聞ける。

だから顔が見える関係をつくる。あとはお互いの職種を理解するという事を重視している。だって薬剤師だとか、ドクターとか、いろんな人がいるけれど、お互いの仕事ぶりだとか、どういう制度に縛られてやっているかお互いに理解していないと、無茶ぶりをしたり不信感になってしまう。「なんで薬剤師なのに、これやらないんだ」とか「ケアマネさんに任せればなんでも出来る」と思っている先生はいっぱいいる。「ケアマネにも縛りがあるって、出来ない事もあるんだよ」という事を話し合いながら、お互いの仕事ぶりが分かると「じゃあ、こういう時は彼に相談しよう」、仮に失敗しても人間がやることだから、また頑張ろう。というふたつが日高会のコンセプト。「顔が見える関係をつくる」と「お互いの職種を知る」ということ。

人との繋がりが1番大事。たとえば私と大滝さんだけとか、私とじいちゃんばあちゃんだけ繋がっていてもじゃダメで、その周りの人達、一緒に支援しているチームがみんなが繋がって、その人を中心にマルをつくれる。チームの人が繋がってないとバラバラになっちゃう。だから、お互いの事を知り合って、お互いの事を尊重して、一人の人に対して最高のケアチームをつくっていく。というのが私の考え。関わっている事業所と私はとても仲が良い。実はケアマネに対して、あまり気軽な事が言いにくい、聞きづらいという相談員がいっぱいいる。ケアマ

ネがえらいという風潮があるんだよね。ケアマネが紹介してくれないと、デイサービスもヘルパーも仕事がないから、ちょっと上下関係みたいなものがつくられてしまっている現状がある。私はそういうの嫌いだから、ケアマネの方からちょこちょこ、ヘルパーさんが働いている現場だとか、デイサービスに訪問して、利用者の様子を一緒に確認して、こっちから、小さな事でも聞いていく。そうすると、ヘルパーさんも些細な事も伝えてくれる。そういう関係をつくっていくと大事な事を見逃さない、ちょっとした変化にも気がつく。だから人との繋がりは大変、本当に大事1番だよ。さっき言った、知識とか技術とか制度とかの前に人との繋がりが大切。

あともうひとつ、相模原を盛り上げていこうという仲間を集めている。仲良しグループじゃないから、自分達がやっている活動とか目差しているものをみんなで共有して、みんなが関われるだったら、ひとつひとつ関わって、要は人と人を繋いで、なにかまた新しいものを作ったり、元々あるものに参加したり、そんな事を求めて日高会を続けている。8割りがエロ話で、2割りぐらいがちょっと役に立っているかもしれない。

『これからの福祉、こうなればいいのにな』

日高：福祉も医療も同じだけど、人が人を支えるという事には変わらない。そこには、お金が絡むし、人が絡む。ヘルパー不足とも言われている。その辺の兼ね合いをとっていかないといけなくなる。そういった意味で言うと、必要な人に必要なサービスが確保出来たらいいなと思う。「ヘルパーさんがいないから、うちの事業所は入れません」で済む話じゃないから。ヘルパーさんがいないと生活が立ち行かない人、デイサービスじゃないと絶対にお風呂に入れないという人には、サービスを続けてもらう。そういう人達には福祉サービスを充てられていられるように。裏を返すと、ヘルパーさんとか、福祉事業所だけで対応してくのが難しくなってくる。5年後10年後。

だから地域住民、お隣さんだよ。昔ながらの関係、おせかっいなおばちゃんっていたじゃない。おばちゃんがピンポーンってやってきて、茶飲み話しながら気がついたら、その場で病院とかケアマネに連絡してくれている。そういう古き良き時代みたいなものも含めて、支えあっていかれたらいいなと思う。

相模原市のキャッチフレーズにもなっている「共生社会・共にささえあう社会」あれだよあれ。それには、高齢も健常も障害も関係ない。みんなが出来る事をやって、支えられる人が支えて、どうしても支えきれないベースのところは福祉サービスで支えていく。そんな感じだと思う。

困ったおじいちゃんがいたら、全員、老人ホームに入れちまえじゃなくて、人には歴史があるのだから、人が支えながら家での生活を送っていきながら、

一緒に酒飲んで野球見て騒いでくれる仲間がいたり。
私そういうじいちゃんになるから、ただ老人ホームに閉じ込められたら嫌だから。
野球が見れて、ビールが飲めて、マージャンが出来たら、それで幸せ。いくらボ
ケても。そういう社会になってもらいたい。そういう思いで活動を続けています。



『忘れられない一日』

そんなものは、誰にでもあるのかもしれない。今回は滝の『忘れられない一日』を書いてみようかなと思う。

新潟、日本海に面して300キロ程の細長い県。私が初めてそこに訪れたのが、1999年1月16日、本当に真冬の頃だ。

この日は、かなり風邪で辛かったので、東京駅でパブロンを買った。それが高値で「こんなに高いのはきっと、場所代が含まれているんじゃないか」と勝手に思いながら新幹線に乗り新潟へ。

途中、長岡を通過した時、あまりにも雪がすごかったので、これはどうなるんだろうかと思ったが、新潟に着くと曇り空だった（余談になるが、長岡市は昭和30年代から除雪パイプが整備されるほどの豪雪地帯だと後から聞いた）。

新潟駅に着き改札を出ると、半月前に電話で告白した彼女が、寒い中、嬉しそうな顔をして待っていてくれた。

彼女が呼んでくれていたタクシーで伊勢丹へ。デパートの最上階のレストラン街のファミレスで、お昼を食べた。食事の場面は覚えていないが、食後、エレベーターホールの小窓から、午後から降りだした雪の中にあったレインボータワーの風景は今でも忘れられない。

それから、いつでもお互いの顔が見られるように、お揃いの写真たてを買い、使い捨てカメラで写真を撮った。彼女のはにかんだ笑顔で僕の方に肩を寄せてくれた事は今でも覚えている。

この日は、片道4時間の日帰りだった。帰る時、彼女が駅まで送ってきてくれ、時間になるまで手を温めてくれていた。

帰りの新幹線の中で今日の事は、きっと自分が50歳になっても、60歳になっても覚えているんだろうなと思いながら、家路に着いた。そんな一日だった。



【編集後記】

自分なりに「ナイアガラタイムス～プレ版～」を作ってみました。

去年の春に大きな区切りを打ち、少しのんびりした活動に移った。仲間と昼食の献立を考えたり、本を読んだり。そんな生活も1年が経ち「なにか新しい事を始めたい」それならば、自分になにが出来たらと考える、たどりついたのが、フリーペーパーづくりだった。

社会人になって、30年以上経つけれど、本当に冴えなくて、何回、仕事を変えても、なんらかの問題でうまくいかない。そんな事の繰り返しだった。けれども、それだけ経験をしているのだったら、人の気持ちも分かり、なにか人の気持ちを軽く出来るフリーペーパーが出来るとは思いませんでした。このナイアガラタイムスです。

形のなにもなく、これからどうなっていくか全く分からないのに、取材に協力して下さった悠朋会の日高さん。このナイアガラタイムスのサブタイトルである「人・力・夢」の題字を書いて下さった渡邊さん。本当にありがとうございました。心より感謝申し上げます。

今号は、日高さんのインタビューと私の文章で構成しましたが、次号からは「美味な話」と「忘れられない一日」はどなたかに書いて頂き、ナイアガラタイムスの輪を広げていけたらと思っています。

今の世の中の状況が良くなる事を信じながら。

発行所 相模原市中央区横山 4-5-4-107

発行責任者 大滝 英史

メール：nb060234-1625@tbk.t-com.ne.jp

 042(755)9105

発行協力 社会福祉法人 「アトリエ」一から百まで堂

相模原市中央区相生 4-13-5